

# 女神丸

《主要目》客船、関西汽船所属、174総トン、主機ディーゼル1基、出力350馬力、最高速力11.8ノット、旅客定員二等32名、三等146名、1929年遠藤秀吉建造（データは関西汽船時代のもの）

## 映画『二十四の瞳』に登場する小型客船

（上）「おりいぶ丸」（筆者撮影）  
（下）「女神丸」（『関西汽船の船半世紀』より）



昔の日本映画に出てくる船ぶね

テレビで古い映画をみてみると、忘れかけていた昔の船の姿が出てきて、なつかしく思うことがある。いつだったか「寅さん」シリーズの第六作『純情編』をみていたら、九州商船の「楓丸」の姿があった。寅さんが長崎から五島に行く場面だった。

石原裕次郎の映画となると、もっと古い船が出てくる。大半はモノクロだが、カラーの映像もある。今となつては貴重な映像だ。

なかでも珍しいのは、日活のカラー映画『鷲と鷹』に登場する「改E型」戦時標準船。外形はむろんのこと、ブリッジのたたずまいから荷役の情景まで、色鮮やかに記録されている。低性能の「改E型」に乗り組んで苦勞された船員さんや裕次郎ファンには申しわけないが、筆者はこれをみて大いに興奮した。私事になるが、筆者は阪大の船舶工学科の非常勤講師をつとめたときに、この映画のビデオテープを教材に使わせてもらった。

瀬戸内海の小型客船が登場する映画では、松竹のモノクロ映画『二十四の瞳』が、船好きには楽しい。この映画は、作品自体もたいへん感動的である。その昔、映画館で鑑賞したシルバー世代が多いのではないかな。

木造の機帆船が登場する場面もある。今で



はほとんど絶滅した機帆船だが、かつては国内輸送の有力な担い手であり、瀬戸内海でその姿をよくみかけたものだ。

### なつかしい関西汽船の小型客船群

申すまでもないが、『二十四の瞳』は、小豆島出身の女性作家壺井栄の同名の名作を、一九五四年に木下恵介監督が自ら脚色し、演出にあたった作品である。

物語は、小豆島の分教場に赴任してきた若い女性教師大石先生と十二人の教え子たちの師弟愛と、それを引き裂いた時代の悲劇を淡々と描いたもの。大石先生にふんした高峰秀子の演技と、子供たちの素直な表情が胸をうつが、舞台となっている小豆島の自然も美しい。そしてその自然をバックに、なつかしい小型客船が次々と出てくるわけだ。

登場するのは、「女神丸」<sup>めがみまる</sup>「おりいぶ丸」<sup>おりいぶまる</sup>「はやぶさ丸」<sup>はやぶさ丸</sup>「第十三豊島丸」の四隻。いずれも関西汽船の船である。「おりいぶ丸」と「はやぶさ丸」は、外形と甲板室の映像をみて筆者が船名を推定したものだ。まちがいないと思うが、ちょっと心配。

### 高松〜小豆島航路の定期船

最も船の登場時間が長いのは、金毘羅さんへの修学旅行の場面に出てくる「女神丸」で

ある。ボートデッキで子供たちがはしゃぐ場面では、今ではほとんどみかけなくなった木甲板やキセル型の通風筒も登場する。

この優雅な名の小型客船は、播陽商船の船だった。「天女丸」という船もあった。関西汽船は戦時下の一九四二年、内海航路を経営する七社が統合してできた船会社である。その中心となったのは、大阪商船の内航部門と大阪商船系の播陽商船、土佐商船で、商船系だけで出資比率が約八割を占めた。

「女神丸」は、昭和初期に建造された船としては目新しいディーゼル船である。「天女丸」などともに、阪神〜淡路島航路などに就航していた。播陽商船の船体塗装は白。これも、当時としてはとても斬新だった。

戦後は高松〜土庄（小豆島）航路の定期船になった。「二十四の瞳」に出演したときの船齢は二十四年。かなり古くなっていた。

「離島航路整備法」による新造船「おりいぶ丸」が小豆島航路に加わったのは、ちょうど「二十四の瞳」が撮影されたころだ。もちろん小豆島の特産品にゆかりの船名であるし、この時代、関西汽船は色彩にちなんだ船名を付けていた。流線型の美しい船で、この映画の冒頭に航走中の姿が出てくる。右頁の写真は、高松を出航する「おりいぶ丸」で、三十二年前に筆者が撮ったものだ。

### お召し船になった船も登場

映画では、大石先生の婿さんが島に着いた場面でやや大型の客船が登場する。二層の遊歩甲板だけしか写っていないので、船名の特定がむずかしいが、おそらく「はやぶさ丸」であろう。臨時便で小豆島航路に入ることがあったと関西汽船の社史にある。

「はやぶさ丸」は、敗戦直後に集中建造された「二十八隻組」の一隻である。一九五〇年春の昭和天皇の小豆島ご巡幸のときにはお召し船となり、高松〜小豆島を往復した。帰航便では船内で昼食をとられたという。このときのご巡幸には淡路島も入っており、同じ関西汽船の「山水丸」を利用された。播陽商船のフラグシップだった船である。

「第十三豊島丸」はわずか十九トンの木造客船で、映画では小豆島の遊覧船として登場する。大石先生の婿さんがこの船の機関士という設定だ。修学旅行の場面で、美しい小豆島の海景をバックに、婿さんの木造客船と、子供たちの「女神丸」が反航する映像は、実にすばらしい。この木造客船は、子供たちが成長して出征する場面でも登場する。

「女神丸」はその後も小豆島航路ではたらいだ。解体されたのは一九六四年である。